

Title	良知力著 向う岸からの世界史：一つの四八年革命史論
Sub Title	Tsutomu Rachi, "World history from another side" Tokyo, 1978
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.5 (1979. 10) ,p.654(96)- 656(98)
JaLC DOI	10.14991/001.19791001-0096
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19791001-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

良知 力著

『向う岸からの世界史』

——一つの四八年革命史論——

1848年という時代を区切る年について、歴史に関心をもつわれわれは、何を想い浮かべるであろうか。おそらく大抵の人は、フランス2月革命あるいはドイツ3月革命を、マルクス、エンゲルスの『共産党宣言』を、あるいはイギリスのチャーティストの第3回国会請願の大衆行動をあげるであろう。経済学を学ぶ者ならば、1847～8年の大規模な恐慌やジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理』の出版などに思いをはせるにちがいない。しかしウィーン革命のもり上りと、その悲劇的な崩壊についてふれる人は少ない。筆者も、著者によってはじめてこのヨーロッパ大陸のほぼ全域にわたるブルジョア革命のなかに占めるウィーン革命の重大性について新たな認識をあたえられたのである。

この書物の内容をなす各篇は、著者が、雑誌『思想』などに発表されたものを中心としてまとめられたものであるが、いまここに通読する機会をえて、全体を通してウィーン革命に焦点を絞り、従来不当に無視されてきたこの革命の本質と、その背後にひそむ複雑な事情に照明をあて、曖昧なままに残されてきた問題をひとつひとつ丹念に解き明かそうとする努力に、私はまず感動した。この全篇を貫くものは、史料を駆使した実証的精神であるが、それとやらんで通説的・支配的な歴史観の下で、無視されつづけてきた名もなき民衆——プロレタリア——の苦悩と煩悶、そして貧困と絶望の描写を媒介にして、この革命の本質に肉迫しようとするヒューマニズムであろう。私はここにこの書物によってうけた感銘を記すとともに、私の研究視点から著者に感想をのべ、御教示をえたいと思う。

私は、この書物によって、いままであまりにも無雑作に使っていた「プロレタリア」という語のもつ意味について深く考えざるをえなかった。1848年ウィーン革命当時の中央ヨーロッパにおいては、プロレタリアという言葉は同時に、西欧世界からみて東ヨーロッパの「歴史なき民」、エンゲルスの分類によれば、歴史における進歩の担い手としてのドイツ人、ポーランド人、マジャール人にたいして、反革命的で反動的な役割を果すチェク人、クロアチア人、スロヴァキア人、ルテニア人、セルビア人およびヴァラキア人などと密接な関連をもっていたという点と、このようなエンゲ

ルスの分類には、「ロシア・ツァーリズムにたいする西欧の防衛本能に裏打ちされていただけでなく、彼らの伝統的な歴史観や人間観に基づいていた」(48頁)という側面があった。

エンゲルスの諸民族にかんする二つの分類はすでに周知の事実であるが、問題は、著者の本書における研究によって明らかなように、ウィーン革命における革命的・英雄的行動が、「進歩の担い手」としてのドイツ人やマジャール人あるいはポーランド人によって担われたのではなく、実にこの「反革命的で没落する運命」をもつ諸民族のプロレタリアによって担われたというパラドックスであり、筆者の読みの浅さもあろうかと思うが、この点こそ著者がもっとも強調しているところではないだろうか。だとすれば、エンゲルスの提言には深刻な問題が胚胎していることになる。この点について筆者は著者とは別の視点から考えてみたいと思う。

「1848年にとってプロレタリアートとは何か」のなかで、著者は、「革命期のここベルリンにおいても、対プロレタリアの失業対策として公共土木事業が二月、三月のブルジョア革命の命とりとなり、この土木事業がブルジョア革命のとりつくり革命的体裁を無惨に引き剥ぐのである」(82頁)とのべているが、この指摘はきわめて重要である。

本来、1848年の革命はいずれの国においても、都市市民層、すなわち商店主、独立自営業者、および熟練親方などを中心とするブルジョア階級ないし小ブルジョア階級を主体として、貴族や封建の特権階級にたいし、普通選挙権の獲得や封建的特権の廃止あるいは苛酷な租税の軽減を求める運動として始まったのであるが、通説に従えば、ブルジョア革命は、これ以上でもなくこれ以下でもない理由によって、はじめられたことは歴史的事実である。問題は、オーストリア＝ハンガリア帝国が多民族国家であり、そこでの多くの被支配民族から分出するプロレタリアが首都ウィーンに蝸集し、戦闘化することによって、「1848年ウィーン革命は、プロレタリアの血を内包した暴力的民主主義革命である」(131頁)という視点である。著者は、この視点をもっとも重要なモチーフとして把握し、原史料の精密な探索を通じて、この真相を無視しようとする通説にたいし、史実の追求による当時の情景の生々しい描写をもって、読者に迫り、きわめて実証的な批判を展開している。その意味で、「ウィーン革命と労働者階級」が、理論的で且つ説得的であるが、私は、

「もう一つの十月革命——歴史家とプロレタリアの対話として」を読んで、著者の歴史家としての力量の豊かさと文学的才能に感嘆した。理論的な書物に文学的な要素は余計ものかもしれないが、歴史的研究に文学的香気が感じられないとすれば、「畫龍點睛を欠く」というものであろう。とにかく本書のもつ迫力は読む者にだけしか伝わらないので、まず読むことをおすすめする。しかし詳細なドキュメンテーションにもかかわらず、そしてとりわけ、マルクス主義民族理論にたいする精彩に富む叙述にもかかわらず、ウィーン革命におけるプロレタリアの性格についての分析が重要な問題としてのこのである。

著者は、本書の終りに近く、「ガスト・アルバイターとしての社会主義」のなかの結論に近い部分でつぎのように云う。

「いづれ歴史研究として実証しようと思っているけれども、社会主義の土台となるプロレタリアートは、そもそも都市共同体としての市民生活のなかから出てきたのじゃない。それは市民社会の外から、しかも市民社会に住む人間の目に見えない深所から、それこそ「死霊」のように姿をあらわして、市民社会の外まわりに住みついた。西欧的市民社会は、いいしれぬ恐れと不安をもって、氷のような冷たさで背中にはりついてくるこの幽鬼におののいたのじゃなかったか。

つまりプロレタリアートはそもその存在からして西欧市民社会からはみ出た鬼子であり、市民社会の文化にたいする外からの「挑戦」だったのではないか。社会主義も、多くのスラヴ人のそれは、ブルジョアの生産力やブルジョアの文化を土台にして出てきたものではない。たしかにまだ貧しいのかもしれない。家父長的官僚制もあるのかもしれない。だが、そうかといって、西欧的論理を押しつけて、その矛盾を克服できるものではあるまい」(275~276頁)。

この一節には、現代の社会主義について実に重要な問題が提起されているように思う。まず何よりも、これは著者のウィーン滞在中に目撃したことや経験したことが素材となり、Gast-arbeiterを媒介として、独特のプロレタリア観が構想され、同時にそれは、1848年、オーストリア・ハンガリア帝国治下の被支配民族、クロアチア人、スロヴァキア人、ルテニア人などの被支配民族などを中心とするプロレタリア像と重ね合わされているからである。私はこうした著者の考え方

から大きな示唆をえたが、しかし現在のガスト・アルバイターと1848年革命の頃の被支配民族としてのプロレタリアとの間には、決定的な差異があり、ウィーン革命におけるプロレタリアとは質的に異なるものではないかという気がする。

まず著者にお訊ねしたいことは、現在の西欧市民社会の問題である Gast-arbeiterは、相対的過剰人口としての性格をもち、彼らの生国における労働市場における余剰人口、すなわち失業者の出稼ぎ的性格をもち、労働力供給者としての Gast-arbeiter もその受入れ国の側も、その季節的性格を前提としており、西欧市民社会としてのオーストリアおよびドイツへの定着は例外的な場合でしかなかったのではないか。これに反して、1848年のウィーンのプロレタリアは、まさに著者の叙述にみるように、「市民社会の外から」きて、「市民社会の外まわり」に住みつき、いわば西欧市民社会へ割り込んで、ここに腰を据えて生活の本拠を確保し、このなかで逞しく生きようとする人々であったように思われる。「1848年にとってプロレタリアートとは何か」における詳細な叙述と分析は、このことを実証している。だからウィーン革命における彼の行動が戦闘的で勇敢で、エンゲルスが評価したポーランド人やマジヤール人ではなく、まさに彼らこそ最後まで闘い抜いたということは、彼らが、そこで生きる以外に方法がなかったという事情によるのではなからうか。

そうすると、彼らを駆りたててウィーンに密集させたのはどういう理由によるのか。おそらく彼らをはぐくんできた農村共同体の崩壊、たとえば「土地囲い込み」などが進行していたのではなかったか。1848年のプロレタリアの実像をきわめるためには、こうした土地制度の変革というような問題にまでさかのぼるべきだと考えるが、どうであろうか。

なお、本書に直接関係ない事柄であるが、これについて思い出すことはフリードリッヒ・リストの『農地制度論』(1842年、小林昇訳、世界古典文庫、後に岩波文庫)における叙述である。彼は、イギリスの資本主義の発展にともなうプロレタリアートの増大のなかに市民社会の危機を直感し、「ドイツはイギリスのようにはなりえないし、またそうなってはいけない」という視点から、50万人のドイツ人のハンガリーへの移民計画を提案している。リストの意図は、ドイツ人とマジヤールの結合による政治的・経済的統一を前提として、「ドナウ川の、プレスブルクからその河口までの左右兩岸の国々、トルコの北部地方および黒海の西岸」ま

でに達する移民計画であった(なお、この問題については、上掲、『農地制度論』における小林昇教授の解説および『小林昇経済学史著作集』第9巻、『F・リスト研究(3)』を参照されたい)。48年革命直前におけるこうしたリストの移民計画提案は、やはり中部ヨーロッパにおける共同体の問題と深くかかわり合っていると思われる。もしこの時期、すなわち1840年代におけるプロレタリアの形成が、中部ヨーロッパにおける共同体の状況とどのような関係にあったか、この点が、将来もし著者によって明らかにされるならば、リストのこの『農地制度論』も、新たな光の下で読むことができるかもしれない。

非常に卓抜な着想と長い年月をかけられて得られた著書、そして何よりもすぐれた実証主義の所産である本書にたいする書評としては、必ずしも充分ではないが、御教示を戴ければ幸いである。

現在の Gast-arbeiter と 1848年のプロレタリアとの間の区別を筆者は強調したが、しかしそれにもかかわらず、今日の東南アジアの状勢を思うと、著者の云うことも首肯せざるえないような複雑な気持である。いずれにしても、1848年革命は、今日のわれわれの時代とも密接な関連があるという点では、私は、著者と認識を共通にするものである。

〔B6判、未来社、282頁、1978年、1600円〕

飯田 鼎
(経済学部教授)

Royden Harrison, Gillian Woolven,
Robert Duncan (eds.)

*The Warwick Guide to British Labour
Periodicals 1790-1970. A Check List.*

1960年創設の Society for the Study of Labour History が、イギリス労働史研究の活力に満ちた発展をもたらす基礎となったことに疑問の余地はないが、1970年代になると、労働史のビブリオグラフィーないしチェック・リストの作成という研究のもっとも基礎的な作業が、本格的に遂行されはじめた。Joyce M. Bellamy and John Saville (eds.), *Dictionary of Labour Biography* (vol. 1 (1972) —), および、この書評で対象とする *The Warwick Guide to British Labour Periodicals 1790-1970* (1977) (以下 *the Warwick Guide* と略す) は、そのなかでも、もっとも重要なものである。この2種類の刊行物によって、人名(および関連した事項)にかんする整備された文献リスト、および、労働関係定期刊行物のリストといういわば縦軸と横軸が与えられ、研究対象に接近するために必要不可欠な資料名とその所在が、明確に示されることになった。さらに、特定の研究テーマにかんするビブリオグラフィーも刊行されはじめたが、その典型は J. F. C. Harrison and Dorothy Thompson, *Bibliography of the Chartist Movement, 1837-1976* (1978) である。この種のものには、すでに、Brian Harrison, *Dictionary of British Temperance Biography* (Society for the Study of Labour History, Bulletin Supplements, Aids to Research No. 1) や Gillian B. Woolven, *Publications of the Independent Labour Party 1893-1932* (Aids to Research No. 2), さらに、Eugene D. LeMire, *The Socialist League Leaflets and Manifestoes: An Annotated Checklist, International Review of Social History*, XXII, 1977 等があるが、今後ともこのようなビブリオグラフィーの刊行は続行され、研究者に多大な便宜を提供することになるだろう。

ところで、*the Warwick Guide* は、その序文に記されているように、1960年の Society for the Study of Labour History の創立大会に起源をもっている。そのときすでに、労働者新聞等の刊行物 (Labour periodical) が、労働史研究の重要な資料となることが確認され、従来のような institutional history を脱却するために、まず、そのリストの作成が急務であ